台大日本語文研究第 25 期
2013 年 6 月、頁 1-24
2013-03-31 收稿、2013-05-13 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP.2013.25.1

日本上代文學中之老人的造形與機能
—以《古事記》之老人形象中的「對照性」為中心—

鄭家瑜*

摘要

人物研究向來都是文學研究的重要主題。其中,「老人」更是重要的一類人物類型。透過針對故事中之「老人」的形象考察,不僅可以一探作者企圖塑造的「人物形象」,也可以更深掌握作品的內容與結構。在日本文學中,《古事記》《日本書紀》《萬葉集》等上代的作品爲日本文學之嚆矢,針對這些作品之老人形象進行考察,不僅有助於對作品理解的深化,對於釐清與整理日本文學中之老人形象之普遍性概念也極具意義。基於上述的觀點,本論文作爲日本上代文學中之老人的造形與機能之考察的第一篇,針對《古事記》所描繪的老人形象進行考察,尤其著眼於老人形象中的「對照性」。

透過本論文的考察,筆者發現在《古事記》一書中,老人們與王權者之間存在著「老—若」「弱－強」「賤(卑)—尊」「貧—貴」「周縁的—中心的」「非支配者—支配者」等複數的「對照關係」,老人們被賦予與王權者恰好相反的性格,此般的老人形象,與「天皇統治之正統性」之《古事記》的編撰方針密切相符。同時,《古事記》的老人們所具有的「老」「賤」「貧」「弱」等人物要素,也是中古以後之棄老傳說、姨捨山型傳說中常見的要素。

從這些點來看,《古事記》中之老人的形象,對於日本文學裡老人形象之典型的形成扮演著重要的角色,本論文之考察成果,對於《古

* 政治大學日本語文學系副教授

事記》之作品的理解以及日本文學中之老人形象的典型之形成的追溯上，都具重要的意義。

關鍵詞：上代文學、《古事記》、人物研究、老人形象、對照關係

The Modeling and Function of Old People in Ancient Japanese Literature: Concentrated on the Contrast of Portraits of Old People in Kojiki

Cheng, Chia-yu*

Abstract

Character study is always an important topic in literature research. “Old people” is a important type within. This thesis, as a start to the research of “old people” modeling and function in Japanese ancient literature, will be concentrated on the appearance of “old people” in Kojiki.

Through this thesis, we can find kinds of contrast between “old people” and dignitaries in Kojiki like old with young, weak with strong, humble with privileged, poor with rich, edged with central, dominated with dominating, etc. “Old people” are modeled as a perfect contrast to the dignitary. Such a portrait of “old people” is designed to match with the editing guideline of Kojiki, the ruling orthodoxy of Japanese emperor.

And the elements of “old people” in Kojiki, old, weak, humble and poor are usual in tales of abandoning old after medieval, too. From the view of point, the portrait of “old people” in Kojiki actually forms an archetype of traditional image of “old people” in Japanese literature.

Keywords: ancient Japanese literature, Kojiki, character study, portrait of old people, the relationship of contrast

* Associate Professor of the Department of Japanese Language and Literature, National Chengchi University

日本上代文学における老人の造形と機能
―『古事記』の老人像に見る「対照性」を中心に―

鄭家瑜*

要旨

作品中の人物研究は文学研究における重要な視点と方法であり、なかでも「老人」は重要な人物類型の一つである。「老人」という人物類型を通じて、作者の作り上げたい人物像の一端が伺われ、当該作品の仕組みが一層明らかになるのである。『古事記』『日本書紀』『万葉集』などは上代文学の代表であり、これらの作品に描かれている「老人像」を考察することは、作品の理解に繋がっているのみならず、日本文学における老人像の普遍的な概念をまとめることにも重要な意義がある。このような視点に立って、本稿は日本上代文学における老人の造形と機能を考察する作業の第一歩として、『古事記』の老人像を中心に考察してみた。

本稿の考察を通して、『古事記』の老人達は王権者と対極的な性格が与えられていることが分かる。同時に、老人達と王権者との間には複数の「対照關係」があり、それらが「天皇統治の正統性」を強調することを『古事記』の編纂方針として一貫するように造形されていることも分かる。

また、『古事記』の老人の持つ「老」「賤」「貧」「弱」などの人物要素は、中古以降の文学作品に散見される棄老伝説や姨捨山型などの話にも認められる。このことからも、『古事記』に描かれている老人の形象は日本文学における老人のキャラクターの形成には重要な役割を果たしていると言えよう。

キーワード：上代文学、『古事記』、人物研究、老人像、対照関係

* 政治大学日本語文学科副教授

日本上代文学における老人の造形と機能
―『古事記』の老人像に見る「対照性」を中心に―

鄭家瑜

一、はじめに

一つの「作品」を構成するには、「人物」「筋（ストーリー)」「主題」が欠くことのできぬ三大要素である。「人物」がどのように「筋」を展開させたかということは、作品の「主題」と緊密に繋がっている。このようなことからも、人物研究は文学研究における重要な視点と方法であり、作品の登場人物を考察することを通して、作品を一層理解することができるといえる。

文学作品の中に、「老人」が重要な人物類型の一つであることはいうまでもない。たとえば、『紅楼夢』における「劉姥姥」、『竹取物語』の「翁と嫗」、『源氏物語』の老尼君など、これらの老人は物語の主役ではないが、主要な作中人物と重要な関わりを持っている。「老人」という人物類型を通じて、作者の作り上げたい人物像の一端が伺われ、当該作品の仕組みが一層明らかになるのである。

さて、『古事記』『日本書紀』『万葉集』などは上代文学の代表であり、これらの作品に描かれている「老人像」を考察することは、作品の理解に繋がっているのみならず、日本文学における老人像の普遍的な概念をまとめることにも重要な意義がある。このような視点に立ち、本稿は日本上代文学における老人の造形と機能を考察する作業の第一歩として、『古事記』の老人像を考察してみたい。

二、『古事記』における老人の話

『古事記』に登場する老人といえば、次のような例が認められよう。

（1）　八俣遠呂知退治説話における足名椎・手名椎

（2）　倭建命征伐説話における御火焼之老人

（3）　安康記の市辺之忍歯王の説話における面黥老人
　　（この人物は顕宗記では「猪甘老人」という名で記されている。）
（4）　雄略記における赤猪子
（5）　顕宗記における置目の老媼
（6）　建内宿禰

（1）は、毎年娘を食らう八俣遠呂知（頭が八つ、尾が八つある大蛇）がまもなくやってくるため、国神の老夫婦である足名椎・手名椎は困り果てていたが、その時「高天原」で乱暴を振るったゆえに追放され、途中で出雲国に立ち寄った須佐之男命に助けてもらったという話である。

（2）は、景行天皇の子である倭建命が熊襲征伐から帰ると、休むいとまもなく父の命令で、荒ぶる神やまつろわぬ者共を征服するため、東征の途についた。そして甲斐の国に入り、酒折宮に着いたが、そのとき、酒折宮で倭建命を迎えた御火焼之老人は、倭建命の歌を聞いて、即座に歌を返したゆえに、倭建命から東国の国造の位をもらったという。

（3）の面黥老人については、市辺之忍歯王の子である意祁王・袁祁王が大長谷王（後の雄略天皇）による殺害を避けようとするために逃亡したが、山代という地で面黥老人に食糧が奪われたという。この面黥老人は後に「猪甘老人」（顕宗記）として記されている。袁祁王が顕宗天皇として即位した後、かつて逃亡の時に害をなした「猪甘老人」を捜し求めて切り殺し、その一族の膝の筋を断ち切ったという。なお、この二つの話は、一つは面黥老人、一つは猪甘老人と記されているが、「初天皇逢難逃時、求奪其御粮」という顕宗記の記述、また面黥老人の話では老人が自ら「我者、山代之猪甘也」と名乗ったというために、面黥老人と猪甘老人とは同一人物であることが認められよう。

（4）の赤猪子については、雄略天皇がある日、美和河で洗濯をしている美しい赤猪子を見て、即座に結婚の約束をしたが、天皇の迎への知らせを待ち続けていたうちに、赤猪子は八十歳の老婆にな

った。自分の志を表そうとし、赤猪子は人に多くの献上品を持たせて参内して献上したが、天皇は結婚の約束を忘れていたことに気づき、赤猪子の老いた姿を悲しみつつも、相手が大変老いてしまったゆえに、改めて妻に迎えることもできず、赤猪子と歌を交わし、多くの下賜品を与え、彼女を帰らせたという。

（5）の置目の老媼についてだが、顕宗天皇は父の市辺之忍歯王の墓を求めて探していた時に、淡海国にいる賤しい嫗が参上して、「王子（市辺之忍歯王）の御骨を埋めた所は、私はよく知っている」と言い、墓探しを協力してさしあげた。その後、天皇は、老女を宮中に召しいれて手厚く持て成した。のちに、嫗は「僕、甚耆老。欲退本国」と、年取った理由で帰郷のことを求めたので、天皇は歌を作って老女を見送ったという。

（6）の建内宿禰についてだが、成務記において、天皇が建内宿禰を大臣として、大国小国の国造や国々の堺や大縣小縣の縣主を定めたという。また、仲哀記には建内宿禰がサニワをして、神の御言葉を請ったり、皇太子を連れて、禊をしたりする話が記録されている。そして、仁徳記には天皇が建内宿禰を呼んで雁が卵を産んだ様を尋ねたという話がある。これらのことからも、建内宿禰という人物は、いくつかの時代を亘った長寿の人物であることが認められる。にもかかわらず、『古事記』ではこの人物を「老」という字では表現していない。ならば、『古事記』において、建内宿禰はその他の老人とは異なる性格および位置づけが与えられているかもしれない。そこで、建内宿禰という人物の異質性を考える前に、まずは（1）～（5）の用例を中心に検討する必要があろう。したがって、本稿では（1）～（5）を中心に検討し、（6）についての考察は別の機会に譲りたい。

三、『古事記』の老人像に見る「対照性」

さて、（1）～（5）に関する先行研究を見てみれば、話中の主要人物である須佐之男命、倭建命、雄略天皇に関わる考察が多く認められるものの、これら主要人物の話し相手として登場する老人達に

まつわる論述・考察は決して多いとはいえない。

たとえば、(1) の用例については、須佐之男命の人物像や大蛇退治伝承の発生、大蛇退治神話の原理などには数多くの論文があり、深い関心が持たれているにもかかわらず、国つ神の老夫婦はその英雄譚の一環として取り扱われているに止まり、人物像の検討までは行われていない[1]。

(2) の用例に関しても、倭建命の人物像や倭建命伝承の形成・構想に関わる研究はあるものの[2]、「御火焼之老人」の造形に注目した論は管見の限りでは、犬飼和雄「甲斐酒折宮〈御火焼之老人〉考[3]」と小林真美「<御火焼之老人>の造型－『古事記』における時間の描出をめぐって[4]」という論のみである。

犬飼氏は中国の古典の典拠を援用し、〈御火焼之老人〉を、野火を利用して倭建命の軍隊と戦った東国の王であると見ている。しかし、『古事記』の内容に即してみれば、老人の軍事力も老人と倭建命との戦いも認められない。したがって、犬飼説に納得することはできない。

しかし、小林氏は「御火焼之老人」を『古事記』に見る他の老人

---

1 先行研究について、たとえば、吉野裕「素尊鉄神論序説」(『文学』41 巻 2 号、岩波書店、1973)、木村隆司「八岐大蛇の退治に関する伝承について」(『記紀論攷』、笠間書院、1977)、岡田喜久男「大蛇退治」(山路平四郎・窪田章一郎編『古代の文学 (三) －古事記』早稲田大学出版部、1977)、福島秋穂「ヤマタノヲロチの実体について」(『国文学研究』、早稲田大学国文学会、1985。のち同氏『記紀神話伝説の研究』所収、六興出版、1988)、棚木恵子「スサノヲ神話の構想」(『古代研究』15 号、早稲田古代研究会、1983)、同氏「スサノヲ神話の構想(続)」(『古代研究』16 号、早稲田古代研究会、1984)、阿部真司「ヤマタノヲロチ神話－その〈記定〉と原態－」(『日本文学研究』29 号、高知日本文学研究会、1992) など多数あるが、老夫婦の人物像は検討されていない。

2 尾畑喜一郎「倭建命の伝承像」(『古事記の成立と構想』所収、桜楓社、1985)、守屋俊彦『ヤマトタケル伝承序説』(和泉書房、1988)、大久間喜一郎「景行天皇記に於ける倭建命」(『明治大学教養論集』通巻 259 号、明治大学教養論集刊行会、1993)、松前健「ヤマトタケル伝承 (一) (二) (三)」(『松前健著作集　第十巻－日本神話論 2』所収、桜楓社、1998) は「御火焼之老人」に言及していない。

3 犬飼和雄「甲斐酒折宮〈御火焼之老人〉考」(『社会労働研究』40 巻 3･4 号、法政大学、1994)。

4 小林真美「<御火焼之老人>の造型－『古事記』における時間の描出をめぐって」(『日本文学論究』61 冊、国学院大学国文学会、2002)。

達と同様に物語の内部の時間の長さを提示する存在であるとし、『古事記』の老人達の全体像から「御火焼之老人」の造形を捉えようとしており、貴重な先行研究と言えよう。ただし、『古事記』の老人達は「老い」のみならず、後述するように「賤し」などの形象も有している。『古事記』における老人の持つ造形および機能が、物語の内部の時間の長さを提示するといった点に止まらないことからも、それら老人の用例をまとめ、その人物像を再検討する必要があろうと思われる。

また、(3) の用例に関しても主に市辺之忍歯王の子である意祁王・袁祁王の即位の経緯、二王即位の王権的意義、天皇の形象などを中心に論ずるものが多かった[5]。面黥老人の人物造形と物語における機能に注目して考察するものはない。

(4) の赤猪子に関しては先行研究が多く見られる。しかし、それらは赤猪子の巫女としての性格[6]、三輪氏と王権との消長[7]、赤猪子の歌の持つ嘆老および皇室賛美[8]といった点から論じたものが主である。その視点は、筆者に大きな刺激を与え、本稿でもその論に触れているが、果たして皇室讃美や王権との関り合いの中で、赤猪子といった人物はどのような造形および機能を持たされているのか。それは他の老人たちに通じる部分があるのか。『古事記』全体を視野に入れた時、赤猪子の人物像は如何なる意義を持つのか。これらの

---

5 篠原幸久「王権史構想における顕宗・仁賢の位置をめぐって－二王の相譲を中心としてみた－」(『続日本紀研究』257 号、続日本紀研究会、1967)、都倉義孝「オケ・ヲケの物語」(『国文学解釈と教材の研究』36 巻 8 号、学灯社、1991)、荊木美行「顕宗天皇・仁賢天皇」(『歴史読本』51 巻 13 号、新人物往来社、2006) には面黥老人の人物像に言及していない。

6 吉永登「巫女の嘆き－上代説話と歌謡とのある場合－」(『万葉』6 号、万葉学会、1953)、守屋俊彦「赤猪子の話－三輪伝承考－」(横田健一編『日本書紀研究　第六冊』所収、塙書房、1972) などの論を始め、赤猪子の「巫女説」が多く見られる。

7 畠山篤「赤猪子伝承の形成－王権の論理－」(『弘前学院大学・弘前学院短期大学紀要』23 号、1987)、上田正昭『大和朝廷』(角川新書、1995)。

8 島田晴子「赤猪子の歌謡物語」(『五味智英先生古稀記念―上代文学論叢』論集上代文学 8 所収、笠間書院、1977)、長野一雄「引田部の赤猪子」(『徳島文理大学文学論叢』4、1987)、青木周平「赤猪子物語にみる<老>表現－相聞歌の基盤として」(『美夫君志』44 巻、1992)、青木周平「雄略記・赤猪子における会話文の性格」(『古事記研究』所収、おうふう、1994)。

問題に関して従来の論は関心を払わなかったようである。

（5）の「置目老媼」の人物像に関しては、中山美由紀「置目老媼考―老いと巫女性[9]」という論が挙げられるが、中山氏は置目老媼の持つ「見る力・目の力」からその「巫女性」を論じたに止まり、置目老媼の人物像について深く追究しなかった。ほかに、置目老媼伝承の由来[10]、置目伝説における記紀二書の記述の異同[11]などの考察もあるものの、「置目老媼」の人物像は検討されていない。

このように、『古事記』の老人達は主要な作中人物と重要な関わりを持っているにもかかわらず、これまでの『古事記』の老人達にまつわる研究は個別的研究が主であり、老人を『古事記』における重要な人物類型の一つとして捉え、それを通して『古事記』という作品の仕組みを明らかにしようとする作業は不十分であったと言わざるを得ない。

それだけではなく、(1) ～ (5) の話において、老人の会話相手が、いずれも王権を代表する人物であることは注目すべき点である。たとえば、(1) の須佐之男命は天皇家の祖先と見做される天照大御神を象徴する存在である。この点は、須佐之男命が老夫婦の前に自ら「天照大御神の伊呂勢（弟の意）」と名乗ったことによって示されていよう。(2) の倭建命は景行天皇の子である。(3) の袁祁王は後の顕宗天皇である。(4) は雄略天皇で、(5) は顕宗天皇である。このような老人達の会話相手からも、『古事記』において老人達は、「王権者」を象徴する天皇・皇子とは対照的な関係にあると見られ、『古事記』における老人達を天皇・皇子とは対照的な存在として捉えることができよう。

それならば、果たして『古事記』は天皇・皇子とは対照的な存在である老人の話を通して何を語ろうとしているのか。老人達と王権者との間にはどのような対照性があるのだろうか。老人達は如何な

[9] 中山美由紀「置目老媼考－老いと巫女性」(『二松学舎大学人文論叢』56 輯、二松学舎大学人文学会、1996)。
[10] 根岸謙之助「置目老媼について」(『日本文学』21 巻 3 号、日本文学協会、1972)。
[11] 佐佐木隆「《置目伝説》の再検討」(『古事記年報』36 号、古事記学会、1994)。

る造形と機能を有しているのか。以下に、上述した先行研究を基にして、(1) ～ (5) の用例に登場する老人の話を分析し、そこに内包される「対照性」を追究しつつ、『古事記』における老人達の造形および機能を考えていきたい。

(一)「老—若」「弱－強」という対照性

まず、老人達の持つ「老－若」「弱－強」という対照性に注目したい。この対照性は、(1) (2) (5) の話によく示されている。

(1) についてだが、この話は言うまでもなく須佐之男命の英雄譚である。だが、この英雄譚の中で、英雄に助けられた足名椎・手名椎が、国津神の老夫婦と「設定」されているのは、やはり意味深いものだと見なければならない。なぜなら、この段の話は、『日本書紀』の〔本書〕および六つの異伝（一書）にも記されているが、『日本書紀』の記述と比べれば、『古事記』の人物設定は明らかに特殊性があるからである。以下、『日本書紀』と比較しながら、この問題を追究していきたい。

『日本書紀』の〔本書〕の内容を見てみれば、それは『古事記』とは大差がないものの、スサノヲの名乗りなどの点において『古事記』と異なっている。その相違点の持つ意義は後述する。また、〔第一の一書〕では、スサノヲが出雲に降り、稲田姫と結婚した話が記されているが、大蛇の退治の話が記されていない。〔第二の一書〕では、大蛇の退治の話があるが、スサノヲに助けられたのは妻が妊娠中である若い国津神の夫婦とされている。〔第三の一書〕では、スサノヲに蛇を殺すことを求めたアシナヅチ・テナヅチは老夫婦かどうかについては明記されていない。また、〔第四の一書〕では大蛇の話が見えるものの、アシナヅチ・テナヅチ・クシナダヒメといった人物が登場しない。〔第五の一書〕〔第六の一書〕では大蛇退治の話もアシナヅチ・テナヅチの話も存在しない。

このように、〔本書〕を含めた『日本書紀』の七つの所伝から見てみれば、スサノヲの話は必ずしも大蛇退治の話に関連していないこと、またスサノヲの大蛇退治の話があるとしても、スサノヲの援助

を受けた人は「老夫婦」とは限らなかったことが分かろう。この点からも、多くの所伝から一説だけを取り上げて記した『古事記』の人物の出し方は非常に限定的で、スサノヲの援助の対象を「老人」に設定したのは意味が深いものだと考えられよう。

さらに、『日本書紀』の〔本書〕にはスサノヲが「天照大御神の伊呂勢」という名乗りがない上に、大蛇の体から出た剣を「天照大御神」に献上しておらず、「天神」に献上したとのみ記されている。こうした『日本書紀』の記し方と比べれば、天照大御神を重視する傾向が『古事記』にはあったことが認められよう。『古事記』のこうした記述の方向性を念頭において、改めて（1）の話を見てみれば、どうなるのか。

足名椎、手名椎は国神で大山津見神の子であると『古事記』で記載されているごとく、彼らはいわば自然神で、山神の系列に属している神なのである。にもかかわらず、八俣遠呂知説話では、彼らは娘を助ける方法もない、ただ英雄の須佐之男命の指示に従い、大蛇の退治を協力することしか何もできない、無力な老夫婦として描かれている。さらに、須佐之男命が娘の櫛名田比売を求める時に、「天照大御神之伊呂勢者也」という須佐之男命の名乗りを聞くと、足名椎が即座で「立奉」と答え、その結婚の申し入れを受け取ったという。この名乗りも「立奉」という答えも、『日本書紀』にはなく、『古事記』の独自的要素として認められるが、『古事記』の記述には次のような意味合いが含まれていよう。

すなわち、「老夫婦」は国津神であるが、須佐之男命は老夫婦に対面する際に自らを天照大御神の伊呂勢と名乗ったために、天津神の代表だと見られたのではないか。したがって、老夫婦と須佐之男命とは「国と天」との対照関係をなしていると考えられよう。また、このような対照関係において、須佐之男命は強者で、弱者の老夫婦を助けたと設定されているのである。このような設定は無論強者が弱者を援助するという英雄原理に従ったものだが、「国」の世界を象徴する老人が、「天」の世界を象徴する英雄によって助けられたこ

とからも、「国と天」の対照関係における「天」の優位が示唆されていると考えられよう。さらに、「国」の世界を「老人」の形象に託することからも、老人を「弱きもの」として取り扱っているという『古事記』の人物設定の政治的な色彩が窺えるものである。

要するに、(1)の話に登場する老夫婦は、天津神と相対する国津神として登場し、弱いイメージを持つ人物として描かれているが、その弱さの内面には、天照大御神の至高性ならびに「国」の世界に対する「天」の世界の優位が示唆されていることが指摘できるのである。

こうした無力な国津神の老夫婦と英雄の須佐之男命との間には、「老－若」との対照関係をなしているが、その「老－若」という対照関係の深層には、「国と天」との対照、また「弱－強」との対照などが内包されている。いわば、重層的な対照関係がこの用例に存在しているのである。

さて、「老－若」といった対照性は、(4)の用例には「老－永遠の若（不老）」という形で描き出されているのである。

(4)に登場する赤猪子は、最初から老女の姿で現れたのではない。天皇が彼女に出会ったときは「其容姿、甚麗」なる「童女」として描かれているのだが、天皇が結婚の約束を忘れていたうちに、「姿体、痩萎」「容姿既耆」の老婆になってしまったのである。

長年を経てようやく皇宮を尋ねた赤猪子が参上した機に、天皇は結婚の約束を忘れていたことに気づいた。その時、天皇は（91:『古事記』の歌番号、以下同。）「御諸の　厳白樕が下　白樕が下　忌々しき　白樕原童女」と、彼女を神に仕える巫女のように例えた。天皇の歌を聞いて、彼女は直ちに(92)「御諸に築くや玉垣　つき余し誰にかも依らむ　神の宮人」と詠んで、自らの心情を天皇に訴えた。すると、天皇が引き続き、(93)「引田の　若栗栖原　若くへに　率寝てましもの　老いにけるかも」という歌を詠んで、「若いうちに共寝をしておいたらよかったのに」を感嘆した。それに対して、赤猪子も即座に(94)「日下江の　入江の蓮　花蓮身の盛り人　羨しきろ

かも」と、「若さ」への羨望を歌った。同時に、后の若日下部王の若さをも賛美したというように話が展開されていく[12]。

（93）にある「老いにけるかも」について、『新編日本古典文学全集１－古事記』の頭注には「〈率寝〉の主格は我（天皇）であり、〈老い〉の主格も我と見るのが自然」、また「天皇の自身の老いを言うことで、赤猪子は救われることになる」と解釈している[13]。だが、「天皇既忘先所命之事、問其赤猪子曰、汝者、誰老女。何由以参来」「於是、天皇、大驚、吾、既忘先事。」「是甚愛悲、心裏欲婚、悼其亟老、不得成婚而」にある「汝者、誰老女」「大驚」「悼其亟老」という表現からは、天皇は時間がどれだけ経ったのか、また自らも老女と同様に老いてしまったかといったことは、根本的に意識していないことが想定できよう。このことからも、「赤猪子の〈童女〉から〈老女〉への変質を驚く天皇の心情は、自己の〈老い〉を視野に入れていないところに成り立っている[14]」という青木周平氏の指摘が賛同できるものといえる。

このように考えると、（93）の歌は「天皇の自身の老いを言う」のではなく、天皇が自らの過ちを誤魔化そうとし、赤猪子を慰めようとする、意図的な表現として理解すべきではないか。

さらに、（94）の歌は、后の若日下部王の若さをも賛美したものである。雄略天皇が美和河で若い赤猪子に出会ったのは、彼が若日下部王と結婚した後のことであったので、若日下部王は赤猪子とは同年齢か、少し年長の可能性もあるが、二人の年齢は離れていないと想定できる。にもかかわらず、赤猪子は歌を通して自分の老いた姿

---

[12] 島田晴子氏によれば、「<老いにけるかも>と拒絶された赤猪子が感嘆にくれるには、当然対照的な若さへの羨望が歌われるのであるが、その嘆きや羨望が暗さやうらみがましさを感じさせないのは、この歌が同時に后への讃辞となっているからであろう。それは宮廷歌謡の持つ性格でもあったろう。」という。【島田、前掲注 8 論文、p.81】

[13] 解釈は『新編日本古典文学全集１－古事記』の頭注（p.343）による。

[14] 青木周平氏によれば、「赤猪子の<童女>から<老女>への変質を驚く天皇の心情は、自己の〈老い〉を視野に入れていないところに成り立っていることを確認する必要がある。」とある。【青木周平「雄略記・赤猪子における会話文の性格」『古事記研究』所収、おうふう、1994、p.461】

を嘆いて、若日下部王の若さを賛美している。要するに、自らの「老」との対照を通して、后の若さを褒め称えたのである。

以上のように、この物語において、赤猪子の「老」だけが描かれていて、天皇と皇后との「老」が全く語られていないことは注目すべき点である。さらに、赤猪子の老態および嘆老の心情への描写を通して、天皇、皇后の「不老」が浮き彫りになっていることも指摘できよう。この点からも、赤猪子の物語は、単なる妻問いの物語あるいは「嘆老[15]」の物語に止まらず、「皇室賛美」の物語としても認められるのではないか[16]。要するに、赤猪子と天皇・皇后との間には、「老－不老」という対照関係が認められるのである。このような対照関係は大枠で囲めば「老－若」という対照関係の類と言えよう。

さて、（1）の用例のように、「老－若」といった対照にも「弱－強」といった対照が内包されているのだが、似たような方法は（2）（3）（4）（5）の例の中にも存在している。

（2）には、褒美として国造りといった位を与えた倭建命と、位をいただいた御火焼之老人との間にはある種の「上下関係」「優劣関係」が存在しており、この「上下関係」「優劣関係」を通して、「強－弱」の対照性が暗示されているのである。

また、（3）には食糧を奪った罪を犯した猪甘老人は、意祁王との間には、「犯罪者－審判者」「処罰（死）が与えられた側－死を与えた側」といった強弱の対照関係も指摘できる。さらに、（4）と（5）にもそれぞれ天皇から褒賞をもらったことが記されている。

以上に見てきた用例をまとめて見てみれば、『古事記』において、老人は「弱き」「助けられるべき」者で、「褒賞や審判をうける」人

[15] 長野一雄氏によれば、「歌語りは、老いの嘆きの文学となっているのである。『古事記』が散文学史上老いをとりあげた嚆矢だった点で、注目してよいことであろう。」という。【長野、前掲注 8 論文、p.13】

[16] （93）の天皇の歌に対して、島田晴子氏の「赤猪子の歌謡物語」では、「この歌が最後に歌われることによって、この歌謡物語の大団円となり、赤猪子への同情も充たされ、また一介の老女に対して払われた天皇の慈愛深さを歌い上げることで、皇室讃美を忘れない。」と指摘し、天皇の慈愛深さと皇室讃美との関係を指摘した。【島田、前掲注 8 論文、p.92】

物として描かれており、強き・若き「王権者」の相対的な存在として造形されていることが窺えよう。

（二）「賤（卑）－尊」「貧－貴」という対照性

次に注目したいのは、『古事記』における老人には「貧しい」「賤しい」という面が重点的に描かれていることである。

たとえば、（2）の「御火焼之老人」についてだが、この老人はその名義を見れば、「火を焚く」仕事をやっている老人と想定できる。倭建命がこの老人に出会った場所は、酒折宮なので、老人が焚く「火」はただの「火」ではなく、酒折宮を「警護するためのかがり火[17]」だと考えるのは妥当であろう。要するに、老人は、酒折宮を警護するために「夜、篝火を焼いて番をする[18]」人だといえる。

古代では、火を焚く仕事には、主に少年や老人が当たっていた。たとえば、清寧記には「焼火少子」に関わる記述がある。この仕事は一般的には「奴隷階級の者の役目[19]」だったようで、大変「微賤のもの[20]」と見なされていた。この点からも、この話における老人は社会的地位や身分が低い老人だと読み取れる。

また、(3) における面黥老人についてだが、面黥老人は字面通りに「顔に入墨をした老人」である。入墨の習俗は世界的に広く分布しており、「男子は大小となく皆黥面文身す」という『魏志倭人伝』の記述のように、身体装飾として利用されていたことが認められる。しかしそれと同時に、『日本書紀』履中天皇元年夏四月条には「阿曇連浜子（中略）然垂大恩、而免死科墨、即日黥之」とあるごとく、入墨を黥刑、つまり刑罰として使われていたことがある。また、同

---

17 『新編日本古典文学全集 1 －古事記』の頭注（小学館、1997、p.229）、西郷信綱『古事記注釈 第三巻』（平凡社、1988、p.330）、次田潤『古事記新講』（明治書院、1930、p.395）

18 土橋寛『古代歌謡全注釈－古事記編』（角川書店、1972、p.118）

19 土橋、前掲注 18 書（p.118）には、「『古事記』清寧天皇の条には「焼火少子」のことが見え、火を焼くのは奴隷階級の者の役目だったようである。」という。

20 西郷、前掲注 17 書（p.330）、三浦佑之『古事記口語訳－人代編』（p.130 の注 58）においても「火焚きはもっとも賤しい者の役割として物語の中に登場する。老人か少年であることが多い」と解釈されている。

じく履中天皇五年秋九月条には「天皇狩于淡路嶋。是日河内飼部等従駕執轡。先是飼部之黥皆未差。時居嶋伊奘諾神、託祝曰、不堪血臭矣。因以卜之。兆云、悪飼部等黥之気。故自是後、頓絶以不黥飼部而止之。」という記述があり、黥面は古代の飼部のシンボルとして見ることも可能である。

さらに、(3)の話において、面黥老人は自ら「我者、山代之猪甘也」と名乗ったが、猪甘とは、猪を飼育する仕事をし、飼部の一つであった。面黥老人の名乗りからも、この老人は、「豚を飼う」仕事をしている賤民のような存在だと想定できよう[21]。

また、この老人は道傍で飲食をしている意祁王・袁祁王の食糧を奪ったということからも、この老人は生活の糧が満たされていない社会的底辺で暮らしている弱者的イメージを読み取ることができる。

このような社会的底辺で暮らしている弱者的な老人のイメージは、(5)の置目の老嫗にも仄かでありながら、示唆されている。

『古事記』では、この老嫗について、「在淡海国賤老嫗」と記しているように、「賤しさ」を明示している。この置目老嫗の話は『日本書紀』顕宗天皇元年条にも認められる。しかし、そこには「召聚耆宿、天皇親歴問。有一老嫗、進曰、置目知御骨埋処。請以奉示。」とあり、老嫗は耆宿の一人として登場し、「賤しさ」についての描写は記されていないのである。さらに、老嫗の出自についても、『日本書紀』では、「近江国狭狭城山君祖倭帋宿禰之妹」と記している。この倭帋宿禰について、履中紀では、皇子押磐を謀殺する事件に連座されたために、彼は死刑を申し渡されるのだが、殺される前に、「言詞極哀」のために、天皇は殺すに忍ばず、お墓を守る陵戸に当て、山も兼ねて守らせたと記されている。この倭帋宿禰が後に、妹の「置目の老嫗」の功績によって本姓に戻ったのである。

---

[21] 西郷信綱氏によれば、「日本古代では黥面は面として、動物の飼育や漁猟にたずさわる賤民の印であったもののようである」といい、「この猪は山野に棲む山猪ではなく家猪つまり豚のことで、朝廷の料としてこれを買うものを猪飼部と称した」という。【西郷信綱『古事記注釈　第四巻』(平凡社、1988、pp.303-304)】

この『日本書紀』の記し方と比べれば、老嫗の出自を詳しく記述せず、「在淡海国賤老媼」とのみ記載する『古事記』は、物語の焦点を、天皇と老嫗とのやり取りに絞り、老嫗の「賤しさ」を強調するという記述の方法を取ったことが認められよう。同時に、このような記述の方法からも、「在淡海国賤老媼」の「賤しさ」を、天皇の「尊さ」と対照的に取り扱っていようとする目的が『古事記』にはあったことが想定できよう。

そして、その「賤しさ」には「貧しさ」という要素が常に伴っている。(2) の老人は、「火を焚く」仕事をしている。(3) の老人は「猪を飼育する」仕事で皇子の食料を奪った人物である。この二人の老人はいずれも、社会身分が低く、経済力のない存在なのである。(5) の老嫗についてその職業が分からないが、賤しさという点から考えれば、経済力の豊かな人であるはずはない。このように、(1) ～ (5) の中で、(1) の老夫婦は国津神であって貧富の問題とは無縁だし、(4)の赤猪子に関しても貧しい者として描かれているのではないが、(2) (3) (5) の用例を通せば、「貧しい老人」という老人の形象も『古事記』における老人の重要な一側面であることが認められよう。そのうえ、天皇が老人と老女に褒賞を与えたという点からも、『古事記』の老人達と天皇との間には、「賤 (卑) －尊」という対照とともに、「貧－貴」という対照関係も存在することが見られよう。

(三)「周縁的－中心的」「非支配者－支配者」という対照性

以上のように、『日本書紀』と比べれば、『古事記』には老人・老女の「賤しさ」を特に強調しようとする傾向がある。

「いやし」という字について、白川静氏の『字通』によると、「賤」のほかに「卑」「鄙」「野」などの漢字も該当する。さらに、『説文解字』でその四文字の語意を確認してみれば、「賤」とは「賈少也」とあり、「貴」に相対する社会地位の低さ、金持ちに対する経済力のないことを示唆している用語として捉えられる。「卑」とは「賤也執事者」とあり、「賤」に通じているものである。「鄙」とは、「五酇為鄙」「鄙可釋為邊又引伸為輕薄」という意で、辺鄙の意また軽薄の意が

包含されている。「野」とは、「郊外也」とあり、都に対して鄙野・樸野という意味を持つ。この四文字の中で、「賤」と「卑」は主に社会身分や地位や経済力が低いことを説くのに対して、「鄙」と「野」は主に中央に相対する辺鄙、中心に相対する周縁という意味を説くのだと分かる。『説文解字』の解釈からも、『古事記』における賤しき老人・老女達は、社会身分や地位や経済力が低いのみならず、社会においての周縁的な存在でもあると考えられる。

周縁とは中央に相対する概念であることは言うまでもない。黒がなければ、白も存在しない、すなわち老人達の持つ周縁性がなければ、天皇の持つ中央性も認識されないというように、『古事記』における老人達の持つ「周縁性」は、天皇の持つ「中央性」を浮かび上がらせるという重要な機能を有している。古代の身分制度に見られる「賤民」という身分について、「賤民の側から、天皇の存在を逆照射するとき、天皇制の支配の構造がはじめてくっきりと浮かび上がってくるのではないか[22]。」と考えられているが、こうした「賤民」の持つ機能は、『古事記』の老年の人物にも認められることは以上の考察を通して指摘できよう。

この点をさらに、(2)(4)(5)の例に示されている天皇・皇子による「賞」と、(3)の例に示されている天皇による「罰」と併せて見てみれば、「賞」「罰」の判断の基準が天皇・皇子にあること、そして、老人達と天皇・皇子との間には「非支配者－支配者」という対照関係が存在していることも読み取れよう。

四、おわりに

以上のように、『古事記』においては、老人達が特に天皇や皇子の会話対象に設定されている。彼らの「老」「賤」「貧」「弱」などの強調された要素を通して、王権者（天皇・皇子・皇后）などの「不老」「尊さ」「高貴」「強」などの特質が強調されているのである。要するに、老人達と王権者との間にはいくつかの対照関係が成立して

[22] 沖浦和光『天皇の国・賤民の国　両極のタブー』(河出書房新社、2007、p.110)

おり、『古事記』では老人が天皇と対極の概念を持つ人物として取り扱われていることが認められるのである。

一方、『日本書紀』では「時有一老父曰、伝聞…」というような記述が多く認められる。つまり、物語の語り手としての老人が多く存在しているのである。これに対して、『古事記』の老人は主に語り手ではなく、天皇・皇子の会話相手として登場し、天皇の行動に関与する脇役として存在する。この点からも『古事記』の老人の造形は、『古事記』における天皇人物の造形と合わせて把握することができ、老人が天皇説話において重要な意義を持つことが認められるのである。

なお、『古事記』の老人達と王権者との間に存在する複数の対照関係により、天皇の存在ならびに天皇制の支配構造が浮き彫りにされていよう。この点からも、『古事記』の老人達は、天皇と対照的な人物として造形され、同時に天皇の存在ならびに天皇制の支配構造を浮き彫りにさせるという機能が付与されていると言えよう。さらに、『古事記』における老人像の造形は、非常に政治的な色彩を有し、「天皇統治の正統性」を強調するという『古事記』の編纂方針の一貫した表現として捉えることができよう。ここからも、「老人像」の考察は、『古事記』という作品を理解するには不可欠な作業であることが言えるのである。

同時に、『古事記』の老人の持つ「老」「賤」「貧」「弱」などの人物要素は、中古以降の文学作品に散見される棄老伝説や姨捨山型などの話にも見られる。そして、『古事記』の老人達が持つ、天皇や皇子から報酬をもらったという要素も、『竹取物語』における翁のように、老人が何かの契機で致富の道を得るというモチーフとは無縁ではない。このようなことからも、『古事記』に描かれている老人の形象は日本文学における老人のキャラクターの形成には重要な役割を果たしており、『古事記』の老人像を考察することは、日本文学における老人のキャラクター形成の痕跡を追究する上でも有意義な作業だと言わなければならない。

以上、日本上代文学における老人の造形と機能を考察する作業の第一歩として、『古事記』の老人像を中心に考察してみた。以上の考察により、主に（1）『古事記』の老人達は王権者と対極的な性格が与えられていること（2）『古事記』における老人達と王権者との間には複数の「対照關係」が存在していること（3）『古事記』の老人像は「天皇統治の正統性」を強調する『古事記』の編纂方針と一貫していること、この三点が指摘できよう。

ところが、果たしてこれらの複数の対照関係は、同じく『古事記』に登場している老人の建内宿禰には認められるのか。建内宿禰とは如何な造形がなされており、どのような機能を持たされているのであろうか。この問題は『古事記』の老人像を全体的に把握するには考えなければならない問題である。また、『古事記』における老人像の持つ「対照性」は『日本書紀』『万葉集』『風土記』などの同時代の作品にも認められるのか。それらの作品に描かれている老人像の「普遍性」と「独自性」は如何なるものなのか。その「普遍性」と「独自性」には、どのように日本文学における老人のキャラクターの形成あるいは該当作品の編纂意図に繋がっているのか。これらの問題は今後数回に分けて検討してみたい。今回はひとまず、『古事記』の老人像の検討に止まりたいと思う。

付記：本稿は二〇一二年東アジア日本学研究－若手研究者合同フォーラム（2012 年、北京外国語大学主催）にて同題目の口頭発表をまとめたものである。ただし、二〇一二年東アジア日本学研究－若手研究者合同フォーラムでの発表内容は、日本上代文学会・古事記学会合同大会（2009 年）で「『古事記』に見る〈老人像〉」と題した口頭発表の内容を、「対照性」という視点で全体を捉えなおし、王権者と老人達との対照関係を中心に、『古事記』に描かれた老人の造形と機能を整理したものである。また、論文掲載にあたり、査読の先生方から有益なコメントをいただき、記して心から御礼を申し上げたい。

テキスト

山口佳紀、神野志隆光校注・訳（1997）『新編日本古典文学全集 1－古事記』小学館

小島憲之ほか校注・訳（1994～1998）『新編日本古典文学全集 2～4－日本書紀①～③』小学館

参考文献

青木周平（1992）「赤猪子物語にみる<老>表現－相聞歌の基盤として」『美夫君志』44 巻、美夫君志会

青木周平（1994）「雄略記・赤猪子における会話文の性格」『古事記研究』おうふう

阿部真司（1992）「ヤマタノヲロチ神話－その〈記定〉と原態－」『日本文学研究』29 号、高知日本文学研究会

荊木美行（2006）「顕宗天皇・仁賢天皇」『歴史読本』51 巻 13 号、新人物往来社

犬飼和雄（1994）「甲斐酒折宮〈御火焼之老人〉考」『社会労働研究』40 巻 3･4 号、法政大学

上田正昭（1995）『大和朝廷』角川新書

大久間喜一郎（1993）「景行天皇記に於ける倭建命」『明治大学教養論集』通巻 259 号、明治大学教養論集刊行会

岡田喜久男（1977）「大蛇退治」『古代の文学（三）－古事記』早稲田大学出版部

沖浦和光（2007）『天皇の国・賤民の国　両極のタブー』河出書房新社

尾畑喜一郎（1985）「倭建命の伝承像」『古事記の成立と構想』桜楓社

木村隆司（1977）「八岐大蛇の退治に関する伝承について」『記紀論攷』笠間書院

小林真美（2002）「<御火焼之老人>の造型－『古事記』における時間の描出をめぐって」『日本文学論究』61 冊、国学院大学国文学

会
西郷信綱（1988）『古事記注釈　第三巻』平凡社
西郷信綱（1989）『古事記注釈　第四巻』平凡社
佐佐木隆（1994）「《置目伝説》の再検討」『古事記年報』36 号、古事記学会
篠原幸久（1967）「王権史構想における顕宗・仁賢の位置をめぐって－二王の相譲を中心としてみた－」『続日本紀研究』257 号、続日本紀研究会
島田晴子（1977）「赤猪子の歌謡物語」『五味智英先生古稀記念―上代文学論叢』論集上代文学 8、笠間書院
白川静（1996）『字通』平凡社
世界大百科事典編集委員会（1988）『世界大百科事典』平凡社
棚木恵子（1983）「スサノヲ神話の構想」『古代研究』15 号、早稲田古代研究会
棚木恵子（1984）「スサノヲ神話の構想（続）」『古代研究』16 号、早稲田古代研究会
次田潤（1930）『古事記新講』明治書院
土橋寛（1972）『古代歌謡全注釈－古事記編』角川書店
都倉義孝（1991）「オケ・ヲケの物語」『国文学解釈と教材の研究』36 巻 8 号、学灯社
中山美由紀（1996）「置目老媼考－老いと巫女性」『二松学舎大学人文論叢』56 輯、二松学舎大学人文学会
長野一雄（1987）「引田部の赤猪子」『徳島文理大学文学論叢』4、徳島文理大学
根岸謙之助（1972）「置目老媼について」『日本文学』21 巻 3 号、日本文学協会
畠山篤（1987）「赤猪子伝承の形成－王権の論理－」『弘前学院大学・弘前学院短期大学紀要』23 号、弘前学院大学・弘前学院短期大学
福島秋穂（1985）「ヤマタノヲロチの実体について」『国文学研究』早稲田大学国文学会、【福島秋穂（1988）『記紀神話伝説の研究』

所収、六興出版】
松前健（1998）「ヤマトタケル伝承（一）（二）（三）」『松前健著作集第十巻－日本神話論 2』桜楓社
三浦佑之（2006）『古事記口語訳－人代編』文藝春秋
守屋俊彦（1972）「赤猪子の話－三輪伝承考－」『日本書紀研究　第六冊』塙書房
守屋俊彦（1988）『ヤマトタケル伝承序説』和泉書房
吉永登（1953）「巫女の嘆き－上代説話と歌謡とのある場合－」『万葉』6 号、万葉学会
吉野裕（1973）「素尊鉄神論序説」『文学』41 巻 2 号、岩波書店